産経新聞　朝刊　和歌山版　2023年12月3日

くじら日記

太地町立博物館から

「クジラ博士」のセミナー②

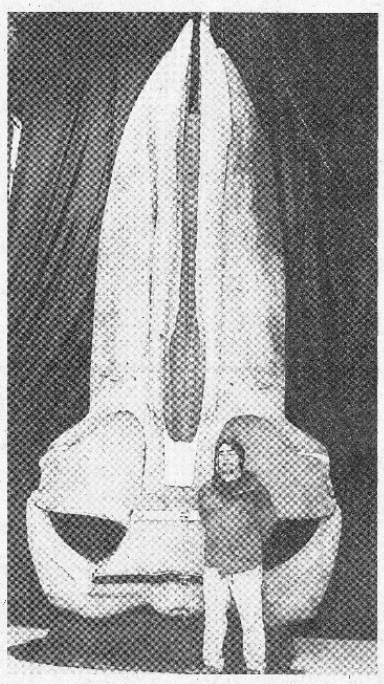
クジラの世界「環境調和型」と「開拓型」

9月に開かれた太地町立くじらの博物館の名誉館長、加藤秀弘先生による職員研修「太地町鯨セミナー」の続きです。スクリーンに「クジラの世界～君ならどちらを選ぶ？クジラが目指す二つの道～」という文字が掲げられました。

先生が話した「クジラの世界」は5千万年前までさかのぼります。祖先は現在のカバに近い原始的偶蹄類で、生活環境を陸上から水中へと移し、進化の過程で後ろ脚の名残となる骨が鯨類にもあるということでした。

そして現在、最も小さいイロワケイルカ（体長1・2メートル）から最大種のシロナガスクジラ（体長33メートル）まで、89種がいることなどを説明しました。さらに「地球への『適応戦略』の違いから、クジラは2つのグループに分かれ、おのおの特徴ある生活を送っている」と指摘しました。

2つのグループとは、口腔内にヒゲ板があるヒゲクジラ亜目（4科6属14種）と、歯があるハクジラ亜目（10科34属75種）です。



「環境調和型」のシロナガスクジラの実物頭骨と加藤秀弘氏。くじらの博物館では全身骨格のレプリカを展示している＝平成12年ごろ（本人提供）

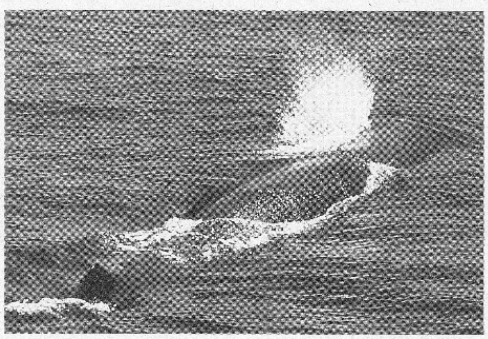
シロナガスクジラやザトウクジラが属するヒゲクジラは夏には高緯度、冬には低緯度の地域に移動するなど回遊して生きます。そして食物連鎖で下位にあたり、量が豊富な動物プランクトンや群集性の魚を効率的に食べます。先生によると、環境に調和させ生存率を保つ「環境調和型」の生き方をしているということでした。

一方、マッコウクジラやバンドウイルカが属するハクジラは、マイペースに回遊し、深海のイカなど嗜好に合う餌を食べます。また強いオスが繁殖の機会を得て、自然淘汰によってその遺伝子を継承しようとする「開拓型」といいます。

こうしたことは、加藤先生の著書「クジラ博士のフィールド戦記」にも詳しく書かれており、「このいわば2つの適応戦略、というかポリシーの違いは、よく考えると相当にかけ離れている。例えば、草食性のゾウと肉食性のオオカミほどのポリシーの違いである」とあります。「共に同じクジラという名称の中に押し込めるのも憚られるほどの違い」ともつづっています。

先生はクジラの2つの世界について説明した後、セミナーを聞く町職員やくじらの博物館のスタッフに「さて、君たちはどちらの道を選ぶのか」という宿題を出しました。筆者を含めそれぞれの生き方をクジラのポリシーにたとえて尋ねる宿題です。これは思いも寄りませんでした。

筆者が提出した回答では「ヒゲクジラのように環境に身を委ねるだけでは、昨今の急激な変化への適応が間に合わなくなるのではないか。ハクジラみたいに目の前の状況を見る力と直感も必要かも」などと曖昧な書きぶりをしました。



「開拓型」のマッコウクジラの雄。相模湾を泳いでいる＝平成12年ごろ（加藤秀弘氏提供）

この宿題に解答はありません。これからの人生で答え合わせをすることになるのでしょう。

セミナーの最後に、ある飼育スタッフが「クジラを通していろいろな世界を見てきた加藤先生にとって『くじらの博物館』とは」と質問しました。

加藤先生は「クジラを専門とした施設として世界的にみても充実している。近年の飼育技術の成長も目覚ましい。くじらの博物館、そしてここでの仕事を誇っていいのではないか」とし、「これからも海に開いた『窓』としての役割を果たしてほしい」という言葉を残しました。

「海に開いた『窓』」というのは、だれもがくじらの博物館を通して海の中の世界をのぞくことができるという意味です。かみしめたいと思います。

（太地町立くじらの博物館館長　稲森大樹）

◇

「クジラ博士」のセミナーは今回で終わりです。原則第1日曜日に掲載します。